

印度に於ける禪淨思想の關係について

光 地 英 學

先ず當題目の禪淨兩思想の關係というのは、後世、就中、中國の宋以後の如き禪淨双修思想のような積極性具體性を意味しているものでないことを、斷つておきたい。

禪宗の開祖は菩提達摩である。達摩は元來、印度出身の人であるから、達摩が禪の嚆矢とみられるからには、印度に禪宗が發したものと見得る。然し禪宗を傳えたのが印度ではなく、中國であるし、又、禪宗の興隆したのも亦中國である。従つて嚴密に云つた場合、所謂、禪と淨土教との交渉は、達摩以後に考察されなくてはならないので、印度に於ける禪淨思想の交渉は、この點妥當でないこととなる。然し禪宗では、その道統を達摩以前に遡り、遠く釋尊に源流をもとめ、それより順次次第相承の系譜をみる。従つて禪の思想は、達摩以前の印度の諸論師にも採り得ることは否み得ないであろう。然し印度に於ける禪門の傳燈相承を、歴史的に考證することは不可能に屬する。これは中國に禪宗が獨立した後に、その依つて來た源を探るべく印度佛教史に傳燈を跡づけたものと思われる。そうして印度に於ける是等傳燈諸師一般の禪思想は、後世の所謂の禪の範疇を以て、明確に規定出來得るものでは勿論ない。たゞ廣義に於ける禪の思想と脈絡を有する程度に過ぎない。されば印度の禪淨關係も、斯る意味の考察に限定されることも、己むを得ないであらう。

印度に於ける禪淨思想の關係に就いて（光 地）

う。

一方、淨土思想は、釋尊佛身觀の發達上に觀得るのであり、極樂淨土思想は、釋尊涅槃界の具象化の上に觀得る。それは特に大乘思想の興起と共に擡頭して來たものである。淨土思想の、印度にすでに發生していたことは、蔽い得ない史實である。それでは淨土教の相承系譜はどうか。淨土教の系譜は、禪の如き次第相承ではなく、超越相承であつて、その始祖は、一般に龍樹とされている。この龍樹の、禪の傳燈祖師であることは、後述の世親の場合と同様である。尙こゝで特に斷つて置き度く思うのは、印度の淨土思想として、彌陀・彌勒・阿閼等に關するもののあるうち、吾人のこゝで意圖する淨土教が、彌陀のそれである點である。この彌陀淨土思想と禪との交渉を、一經典として鮮活ならしめているものを、龍樹出世以前に成立していた大乘經典のうちにもとめるならば、「般舟三昧經」三卷が擧げられるであらう。この經は現存大乘經典中の最も初期に編纂せられたものとみられ、彌陀を説く經典中の最古の文獻に屬する。この經の意味する般舟三昧とは、定行の一で、七日乃至九十日の間、行道すれば、現前に佛を見ることを内容とし、この般舟三昧によつて、彌陀を見る法を明したものである。すなわち、これは禪定三昧に依つて、彌陀を觀見せんとするのであるから、この經

それ自體に、禪淨双修に關する思想を胚胎してゐるものとみなし得る。このように經典それ自體のうちに、禪淨思想の關係を内示するものがあるが、吾人は以下、禪と淨土教との兩思想を、主としてその同一人の思想教學の上に、大乘經典思想内容を背景とし、それとの連關の上に考察し、以て印度に於ける禪淨相關々係究明の具と致し度いと思う。

惟うにかの小乗有部の思想は、法有の立場から、分析的客觀的に無我を説明しようとした。従つて現實を捨離する涅槃を終極的理想とするに至つた。これに對して、法空の立場から、直觀的に無我を體現し、生死と涅槃との一如を實證せんとするのは、大乘教の根本的立場である。これは所謂の空思想で、これを説く代表を經にもとめるならば、歴史的にも思想的にも般若經であつて、それは大乘佛教の當初に立ち、その基本的位置を保任する。般若の空論を特色づける基礎付的意義を繼承して、これを論證の形態に組織したのが、龍樹の空論に他ならない。嚴密には龍樹の空思想も、當時すでに成立した初期大乘經典の空思想の、綜合的組織的大成をなしたものである。一般に般若の立場は、經典の浩瀚な割合に極めて簡單である。要するに一切法の差別相を否定し、相對を絶し、直にその本質上、空であると達觀して、囚われない無碍自由の生活活動力を養うところにある。而もかゝる態度の基本を原始佛教の本質に立脚して、心そのものにおく。こゝに般若思想の禪への親近性がある。すなわちこの般若の思想こそは、禪定三昧の實際の心境を表現したものに他ならない。禪は畢竟、心を空に遊戯せしめることに依つて、自己萬法一貫の眞實に體達するにある。不可得空を實踐し、自身に體現せしめるのが、實に禪の本是である。般若經の中心思想である空は、

單なる認識ではなく、空觀の實踐でなくてはならない。それは禪定三昧の體現である。般若とは智慧を意味する。その智慧を體現するのが、他ならぬ禪定である。龍樹は斯る空思想を、主として「中觀論」に、次いでその入門的意義の許に要約的に著わした「十二門論」、更に大品般若の註釋としての「大智度論」に闡明している。

さて龍樹の空觀は、消極的破邪的否定性を内含する一切皆空論を、一面に開明すると共に、否定に否定を重ねた最後、自ら積極的顯正的肯定性をそれ自體、內的に形作つてゐる。斯る意味合にてその空觀は、單なる否定の論理ではなく、體空觀、すなわち大乘的空論として、空即是色の妙有思想に、それ自體相即するものとなし得る。何の屈託もない廓然玲朗の境地、すなわち空に寫し出される世界は、悉く般若の眞智慧に照らされて、従前とは異つた新天地として展開されてくる。これは否定即肯定の般若所照の妙有の世界であつて、論師は空説を辨證して、空をも更に空じ、再び假名の世界に戻つた。これを妙有化した。疑いもなく眞空より妙有への轉換であつた。眞空に至る過程は、禪定の進展特に止 (Samatha) であり妙有の開展は、三昧の境地特に觀 (Vipassana) である。眞空の照すところ、すなわち妙有の世界に他ならない。斯る妙有の世界廻轉上に現われたもののうち、論師と關係の深いものに、「華嚴經」等もあるが、その最も有力なものの一は、論師の淨土教思想である。華嚴經・淨土經何れも禪定三昧所感の境の、教理化組織化したものに他ならない。而して無限生命（無量壽）を基調とし、般舟三昧又は觀佛三昧によつて、感得された觀照としての佛及び淨土として展開したのが淨土教である。龍樹はこの淨土思想を「大智度論」「十住毘婆沙論」そして更に同第五卷第九「易行品」に述べている。

論師は「智度論」「十住毘婆沙論」の各所で彌陀に關して説いているが、その淨土教思想の表明は決して深くはない。これに比較して「易行品」にては、彌陀淨土思想を一段と鮮活ならしめている。上述の如く第一には龍樹の空思想と禪、妙有思想と淨土教に、第二には更に龍樹の淨土思想は、禪定三昧所感の境であるが、特に華嚴經等の妙有思想に對し、般若空の指方立相化に依つて立てられたものである。空假のうち、空に即した假である。空は禪に、假は淨土にと、而もそれを中觀の立場にて相即せしめたもので、以上二點に龍樹の禪淨の關係思想がみられ得ると思う。

次に無著に考察を移してみる。論師の禪思想として、注目したいのに、師に「金剛般若經論」二卷、及び「金剛般若波羅蜜多經論釋」三卷、「能斷金剛般若波羅蜜多經論頌」一卷のあることである。由來、金剛經は後世、中國の三論・法相・華嚴・天台の諸家、就中、禪家に於て最も多く須いられ、我國の禪宗に於ても、最も盛に讀誦されている經典である。禪宗の一應の大成者といわれる六祖慧能や又、五祖弘忍等も、金剛經と深い關係のあつたことは著名である。由來金剛經の說示する要旨は、無所得空の般若の法門を開示するところにある。この經は無相を宗として、無住を體とし、妙有を用としてゐる。衆生性中の本有を自覺せしめることを以て本領とする。上陳の如く歴史的思想的に、金剛經の禪との關係よりして、金剛經註釋者無著に、禪の思想を探り得ることは、決して失當ではないと思われる。次に無著の淨土教に關する思想は、先ずその「攝大乘論」に散見している。すなわち發願して彌陀の淨土に往生し得るとの主張である。又梵文で無著の著となつてゐる「大乘莊嚴經論」には、彌陀を見んと願う者は、一切皆その淨土に往生し得ることを主張して

いる。然し攝論・莊嚴經論、何れもそれ自體が淨土教思想宣場のものではなく、それだけに、その淨土教思想は、決して深刻なものではない。この無著の禪淨關係に就いては、次に述べる世親と一括して言及したい。

次に世親の禪思想としては、彼論師の「金剛般若波羅蜜經論」三卷と、「能斷金剛般若經論釋」三卷と、「能斷金剛般若經論頌」三卷とに探り得るかと思われる。その般若、そうして金剛般若の思想と禪思想との關係からして、世親の禪思想を探り得ることは、龍樹・無著の場合と軌を一にして攻究し得るであらう。これを全般的にして無著・世親の佛教は、約言するならば瑜伽佛教であり唯識佛教である。その唯識佛教の認識論的問題としての三性は、その實體觀からして、畢竟、三無性に歸する。この點、瑜伽佛教も空意識の上に再認識される。斯る觀點は、そのまゝ空の實踐としての禪への道を示唆するものといふ得る。又論師の淨土教に關する思想を表明したものとしては、「淨土論」一卷がある。上掲諸師の淨土教思想表明の勞作は、何れも淨土教そのものを闡明するのが主目的ではなかつた。これに對し世親の淨土論は、頗る淨土教の中心に近接してゐる。が然し、後世の發達した淨土教からみて、特異な位置を示している。何となれば、この論の中心は觀察であり、止觀双連に立つて、特に觀に重點をおいて說示されているからである。元來、止觀は禪定三昧の内容を成す。それだけにこの淨土論それ自體が、禪的態度からする淨土思想の開顯であるとなし得るであらう。こゝに淨土論自體に於ける世親の禪淨思想を探り得るに吝かではない。

次に無著・世親の禪淨交流思想を綜括すれば、次の如く要言出來るであらう。(一)無著世親の佛教の三性は、そのまゝ三無性へと轉開

する。この間の空理は、畢竟、禪思想へと脈絡づけられる性質を帯びる。このことと無著の攝論にみられる淨土教思想との關係。(二)二論師が各々金剛般若の註釋の勞作をなしている。それと無著の攝論の淨土教思想、並に世親の淨土論のそれとの關係。(三)世親の淨土論に於ける禪淨の相關圓融思想。かく究明して來るならば、二論師の禪淨關係思想は、龍樹の場合と同じく、必ずしも積極的強力なものでないにしても、考察され得る充分の問題を提供している。

尙、綜括的に補足して、注目したい二點がある。(一)前掲の如く、印度の禪は、後世のような明確な思想概念があつたのではない。それは淨土教の思想が、よしの發達したそれらと同一ではないにしても、明確に認められるのとは如同しない。然し禪の思想は、間接的外延的に探り得るには、必ずしも絶望的ではない。何となれば、印度の諸論師は何れも禪定三昧の行者であつたとみられるからである。思想それ自體に、必ずしも禪の見解を示さなくても、その生活諸行事・思想總て、禪定三昧が基調をなしていたと考えられる。淨土教思想具有の諸論師、又これに漏れない。この點、その人それ自身、禪と淨土教的なものを相關せしめている要素を孕む。(二)坐禪三昧にて成正覺された釋尊が、三昧を基調とされ、三昧中にあつて説法せられた。諸經典は多く釋尊の入定説法の態によつて示されている。諸經典は悉くといつてよい程、禪定三昧を基盤とする禪觀の諸表現であることが、充分諄とされる。淨土諸經典、亦これに漏れない。従つて淨土經典それ躬らに、禪と淨土の關係的なものを、消極的にしろ、暗示している。如上の二點、並に三論師に就いて既述した點等に、印度に於ける禪淨兩思想關係に就いてこの問題がひそんでいないかと思う。

最近スカンジナヴィヤ諸國に於けるインド學の動向

デンマーク コペンハーゲンの王立圖書館には L. Busch-aardt 氏が活躍し、またその蒙古學者 Grenbeck 教授は東洋學雜誌の『Acta Orientalia』を刊行している。王立學士院では V. Trenchner の『バーリ語批判的辭典』編纂の事業が、コペンハーゲン大學サンスクリット講座擔任の Hans Hendriksen 教授によつて續けられている。またヨーガ研究で有名な Paul Tuxen 教授は老齡ながらヨーガ・スートラ再訂版の發行を計畫していると云う。

ノルウェー オスロー大學のサンスクリット講座は、幾多の業績を發表した Sten Konow 氏によつて名高い。氏亡きあと、G. Morgenstierne 教授が當り、西北インド諸言語の研究をすすめている。

スウェーデン Uppsala, Lund, Goteborg の諸大學でサンスクリット研究が行われ、またストックホルム大學の比較宗教學者 Arman 教授にはリグ・ヴェーダに關する著書がある。

(中村 元)